は　じ　め　に

大江町文化的景観調査委員会　委員長　入間田　宣夫

大江町では、平成 16 年に制定された景観法を受けて、平成 19 年 3 月に景観条例を制定。その翌月には山形県内で 3 番目の景観行政団体に選定されている。それによって、町域のすべてにわたる広がりのなかで、良好な景観を「みんなで創り、次代につなげよう」（『大江町景観計画』）とする取り組みが始められている。

そのうえで、今回は、それらの良好な景観のなかでも、文化的景観として見るべきものを選びだして、保存のための必要な措置を講じるべく、調査活動に取り組むことになった。

調査活動は 4 年にわたり、委員会メンバーによる精力的な踏査・見分、ならびに事務方による情報収集によって、大きな成果を収めることができた。それによって、大江町の文化的景観には、文化財保護法に規定された「重要文化的景観」として選定されるのに相応しい価値が具えられていることを、具体的に解明することができた。

調査活動にあたって、それらの文化的景観に関して、より一層に明快なイメージを喚起すべく、 4 つの視点から検討を進めた。すなわち、「山城の景観」「小漆川城下町の景観」「川と舟運の景観」「農山村の景観」という視点をもつことによって、地域的な景観のトータルな成り立ちを鮮明にして、その基本的な骨格を際立たせようとしている。

それらのうち、「山城の景観」は、中世後期に、五百川峡谷を流れ下った最上川が大きく湾曲する絶壁の辺りを見下ろすかのように築かれた左沢（あてらざわ）楯山城に関わるものである。そのような、水陸交通の要衝を意識しながら、城と町屋群を相関的に配置することによってかたちづくられた景観形成の大枠は、その後における地域的な景観づくりの原型としての役割をはたすことになった。あわせて、いまに伝えられている威風堂々の山城の姿は、地域住民による景観認知をかたちづくるうえで最良の促進材料となっている。

「小漆川城下町の景観」は、近世初頭に築かれた小漆川城と城下町に関わるものである。城そのものは短期間で廃棄されて、代官所に代替されることになったが、水陸交通の要衝を意識しながら、武家によってリードされた景観形成のありかたには変わりがなく、近世を通じて受け継がれることになった。たとえば、城の建設にあわせて実施された計画的な都市の形成によって、巨海院・実相院・神明社・八幡社ほかの寺社地が設定されるとともに、城内には武家屋敷群が、城下には内町・横町・原町ほかの町並が設定されている。それによって形成された地域的な景観の基本的な骨格が、いまに受け継がれている。たとえば、短冊状の地割に即して設営された店構えと倉庫のセットが、度重なる大火にもかかわらず、再建を繰り返して、伝統的な町並の雰囲気を醸し出している。

「川と舟運の景観」は、中世に始まり、近世に大きな発展を遂げた最上川舟運に関わるものである。河岸には、大量の荷物が積み上げられて、大勢の人びとが立ち働いていた。それに関連する町並や米蔵などの名残が、いまに伝えられている。寺社の佇まいや奉納物からは、舟運とともに暮らした人々の祈りをうかがうことができる。祭りのにぎわいや民俗芸能にも、かつての繁栄の名残が示されている。さらには川舟の航行を円滑ならしめるために開削された舟道など、舟運そのものに関わる景観も、いまに伝えられている。

明治 10 年代を過ぎて、舟運が衰退することになっても、町場の賑わいを維持しようとする努力が積み重ねられた。たとえば、左沢線（鉄道）が敷設されて、モダンな駅舎にアクセスする新道が開設される。最上川の渡河については、それまでの渡船場に最上橋（旧最上橋）が渡される。度重なる大火を経て、火災に備えたまちづくりが行われる。などのことがあって、新たな都市景観が重層的にかたちづくられることになった。

「農山村の景観」は、町場のにぎわいに相関して、地の利を生かした生業を展開するなかで形成された、集落・田畑・山林などの織りなす美しいアンサンブルに関わるものである。青苧の繊維を取り、蚕を飼い、薪炭を仕

立てる、などして獲得することができた現金収入によって、豊かなくらしと文化がかたちづくられた。町場との往来のなかで、さらには三山参りの旅人によっても、さまざまな情報・文物が将来された。それらの名残りを物語る景観要素が、たとえば小堂に奉納された「前句寄」（前句付）の掛額や堂々たる民家の佇まいなどが、いまにひっそりと伝えられている。

それらの景観が複合的かつ重層的にかたちづくられることになった土台には、山間を流れ下った月布川の支流が、平地に出て、合流しながら、一本の川となって、最上川に注ぐ辺りに、町場が形成されたという地理的な条件があった。そのような谷口集落といわれる町場では、山地の生産物と平場のそれが交易され、にぎわいの空間が現出される。そのために、山間の集落と平地の町屋を結びつける路線が形成される。それが常であった。

だが、それだけではない。そのうえに、最上川舟運・寒河江街道・三山往来という広大な世界につながる幹線ルートが地域を南北に縦断していた。そのために、平地の町屋には、谷口集落としての通常一般の役割のほか、広域的な交通の要衝に位置して、大規模な物流を円滑ならしめるターミナルとしての役割を期待されることになった。そのターミナル機能を調整する城・代官所なども設置されることになった。

山間の谷々に散在する集落にしても、平地向けの産物ばかりではなく、遠く上方方面に向けた商品作物を生産・搬出することになった。それにあわせて、三山参りの旅人を客とする生業にも関与することになった。

山地と平地を結びつける路線が延びる東西のルートを横切るようにして、最上川舟運・寒河江街道が延びて、置賜方面と寒河江方面との物流を媒介する。さらには、三山往来のルートが延びて、置賜方面を経て南方から訪れる三山参りの旅人らを通過させる。そのような複合的かつ重層的な交通体系のありかたが、通常一般の谷口集落には望むべくもない特別なにぎわいを産み出し、同じく通常一般の山間集落には望むべくもない特別な豊かなくらしと文化をもたらすことになった。すなわち、地域における複合的かつ重層的な景観の特別にすぐれたバージョンを形成することになった。